

1. 発熱

発熱は临床上、最もよく見られる症状の1つであり、多くの疾病に現れる。一般的には口腔温では37.3℃以上、腋下温では37℃以上、直腸温では37.6℃以上を発熱とみなしている。発熱は病因の違いにもとづいて外感発熱と内傷発熱に分類される。

外感発熱は外邪を感受し、人体の正気と外邪が相互に争うことによりおこる発熱である。これには急に発症する、経過が短い、発展が早いなどの特徴がある。またこのタイプは発熱が重く、初期には悪寒があり、さらに外感による症状を伴う。多くは実証である。現代医学では感染による高熱（急性伝染病を含む）、熱射病、マラリアなどによる発熱がこれに相当する。

内傷発熱は飲食失節、過度の労倦、七情の異常な刺激により、臓腑の機能が失調し、気血逆乱、陰陽失調、陰陽偏盛となりおこるものが多い。これには緩慢に発病する、経過が長い、発展が緩慢などの特徴がある。このタイプの発熱は程度は軽く、悪寒はなく、臓腑の病変を伴うものが多い。虚証または虚実挾雑証のものが多い。現代医学では機能性の微熱や痛、血液病、結合織疾患、結核病、内分泌疾患などに現れる発熱がこれに相当する。

病因病機

1 外感発熱

【1】風寒による発熱（外感風寒）

風寒の邪気を感受して衛陽が閉塞したり、営衛不和になると発熱がおこる。また寒邪が侵襲して表から裏に入り、邪気と正気が抗争したり、または寒邪が熱化して邪熱熾盛になると発熱がおこる。

【2】風温による発熱（風温上受）

風温の邪が皮毛または口鼻から入り、そのために衛気がうまく宣泄できなくなると発熱がおこる。また温邪内盛となり気分が熱がこもったり、邪が営血に入り、熱毒熾盛になると発熱がおこる。

【3】湿熱による発熱（湿熱薫蒸）

外感湿熱または湿邪が侵入して熱化し、この湿熱が三焦に留恋して薫蒸 [いぶし蒸すこと]

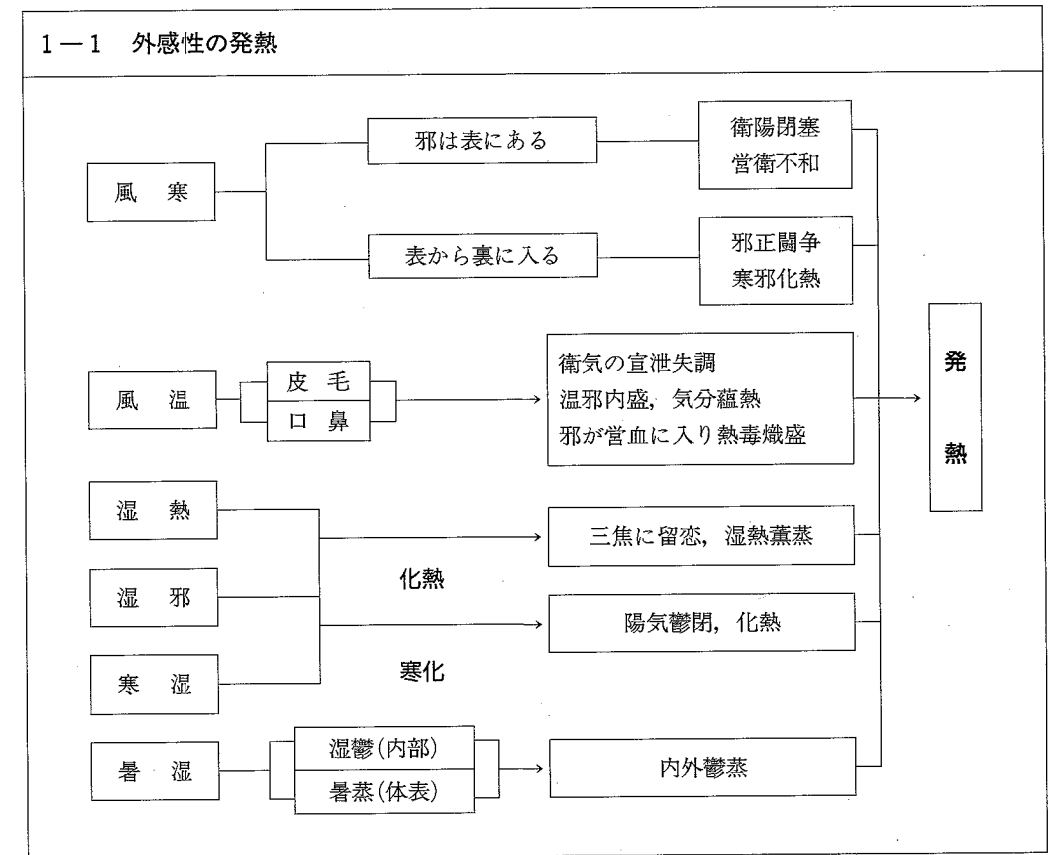
すると発熱がおこる。

【4】寒湿による発熱（寒湿鬱閉）

外感寒湿または湿邪が侵入したために陽気が鬱閉し、この鬱閉の状態が改善しないと発熱がおこる。

【5】暑湿による発熱（外感暑湿）

夏季に暑湿の邪気を感受し、湿邪が内に鬱し、暑邪が体表に薫蒸すると発熱がおこる。



2 内傷発熱

【1】陰虚による発熱（陰虚内熱）

湿熱病や下痢が長期にわたって改善しなかったり、温燥薬を過度にまたは長期にわたって

服用していると、陰液を損傷しやすい。そのために陽気を制御できなくなって陽気偏亢になると発熱がおこる。また平素から陰虚体質の人、同じ病理メカニズムで発熱がおこる。

【2】気虚による発熱（気虚発熱）

労倦や飲食失調により脾胃気虚（元気不足）となると、このタイプの発熱がおこる。

※その病理メカニズムについては、代表的なものとして次の2説がある。

- ①脾胃気虚となり中気が不足して津液をうまく化生することができなくなると、陰津が不足する。そのために陽を制御できなくなると、陽気が浮越して発熱がおこる。
- ②脾胃気虚のために中気が下陷し清陽が昇らなくなり、それが鬱すると発熱がおこる。

【3】血虚による発熱（血虚陽浮）

久病による臓腑の虚損、とりわけ心肝血虚や脾不生血のような病態では、陰血が不足しているために陽気を制御できず、そのために陽気が浮越すると発熱がおこる。出血、産後、手術による過度の出血によっても、同じ病理メカニズムにより発熱がおこる。

【4】肝鬱化火による発熱

情志が抑鬱状態となり、肝気がうまく条達できなくなり、気鬱となり化火すると発熱がおこる。また激怒したために肝火内盛になると発熱がおこる。

【5】瘀血停滯による発熱

気滞、外傷、出血などは、体内に瘀血の停滯をひきおこしやすい。このために気血が抑止されて鬱すると発熱がおこる。

証分類

1 外感発熱

【1】風寒による発熱

主 症：悪寒が強く発熱は軽い、無汗、頭痛、身体痛

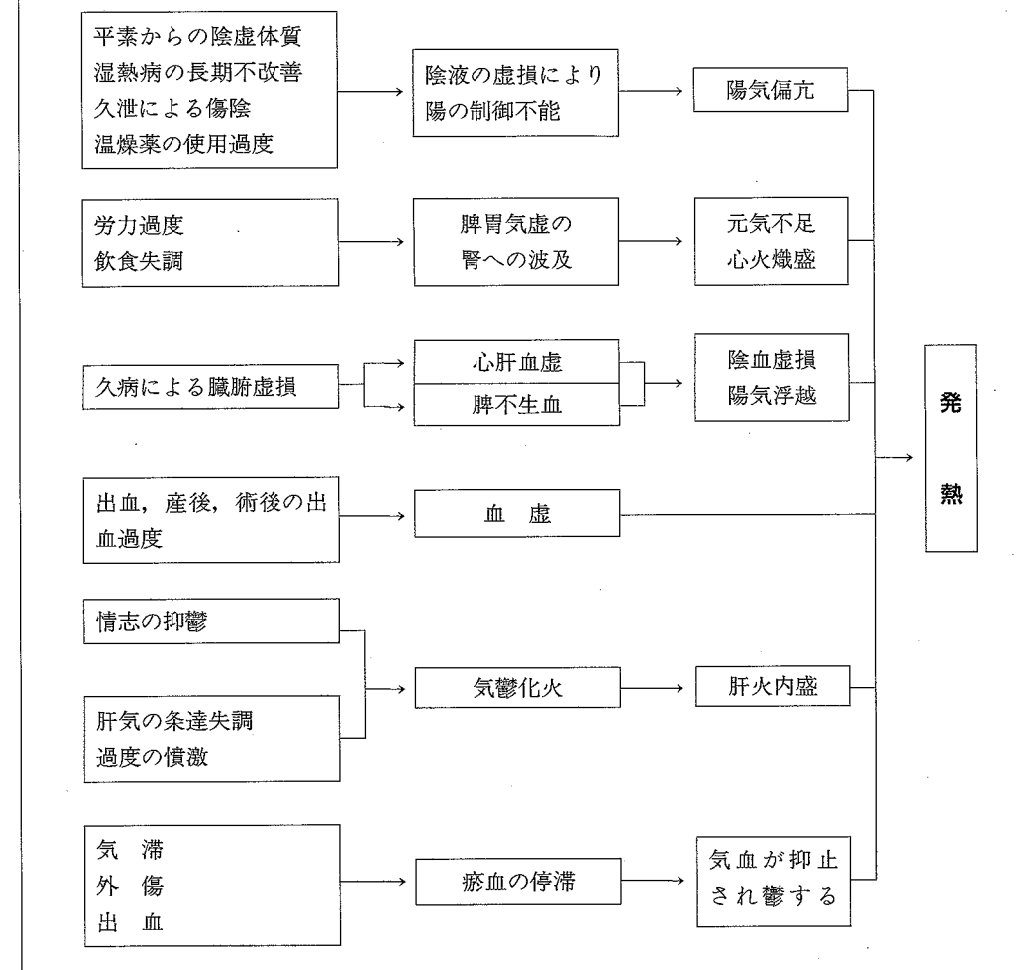
随 伴 症：鼻閉、鼻声、くしゃみ、鼻汁、喉の癢痒感、咳嗽、口渴はない、または微かに渴き熱飲を好む

舌 脈 象：舌苔薄白、脈浮または浮緊

証候分析：寒は陰邪であり、凝滯性があり、最も陽を損傷しやすいという特徴がある。

- ①悪寒が強く発熱は軽い、無汗——風寒外束により毛竅が閉塞し、衛陽が抑止され

1-2 内傷性の発熱



て閉塞するとおこる。

- ②頭痛、身体痛——風寒が経脈を阻滯させるとおこる。
- ③鼻閉、鼻声、くしゃみ、鼻汁、喉の癢痒感、咳嗽——肺は皮毛に合している。皮毛が邪をうけ肺気不利になると、これらの症状がおこる。
- ④口渴はない、または微かに渴き熱飲を好む——風寒が表にあり、まだ裏に入って熱化しておらず、津液を損傷していない現れである。
- ⑤舌苔薄白、脈浮または浮緊——これらは風寒の象である。

【2】風温による発熱

主 症：発熱が重く悪寒は軽い，微かに汗がでる，顔面紅潮，目赤，口乾，微かに渴き少し飲む

随 伴 症：頭痛または頭昏，頭脹，咽喉の乾きまたは疼痛，咳嗽，痰は黄色く粘り，鼻閉，粘り鼻汁

舌 脈 象：舌辺と舌尖は紅，舌苔薄黄，脈浮数

証候分析：①発熱が重く悪寒は軽い，口乾，微かに渴き少し飲む——風温（熱）は皮毛または口鼻から侵入し，陽邪であり化火しやすく，最も陰を損傷しやすいという特徴があるためにおこる。

②微かに汗がでる——風熱が上犯し，肌表にて薫蒸して肌腠がゆるむためにおこる。

③顔面紅潮，目赤，頭痛または頭昏，頭脹，咽喉の乾きまたは疼痛——風熱が清竅に上蒸して清竅不利になるとおこる。

④咳嗽，痰は黄色く粘り——これは肺失清肅の現れである。

⑤鼻閉，粘り鼻汁——肺は鼻に開竅しており，肺気が風熱の侵襲をうけると，これらの症状がおこる。

⑥舌辺と舌尖は紅，舌苔薄黄，脈浮数——これは風熱の象である。

【3】湿熱による発熱

主 症：発熱，口苦，頭昏，咳嗽，痰は白く粘り，咳声は重苦しい

随 伴 症：胸脇脹満，食欲不振，嘔悪，倦怠，乏力，四肢のだるさ，大便秘結または下痢，小便短赤

舌 脈 象：舌苔白膩または淡黄で膩，脈濡緩または弦滑

証候分析：①発熱，頭昏——湿熱または湿邪が裏に入って熱化し，三焦に留恋して気機を阻滯させ，清陽が昇らないとおこる。

②咳嗽，痰は白く粘り，咳声は重苦しい——湿には重濁性があり，脾陽が抑止されて水湿の運化が悪くなり，そのために痰が生じるとおこる。

③口苦，胸脇脹満，食欲不振，嘔悪——脾の運化が悪くなり，湿熱が中焦に阻滯して胆気不利になるとおこる。

④倦怠，乏力，四肢のだるさ——脾は四肢を主っているが，湿熱が脾を抑止すると，これらの症状がおこる。

⑤小便短赤，大便秘結または下痢——湿熱が下焦に阻滯すると小便は短赤となる。また熱邪が強くと，腸液を損傷すると大便秘結となり，湿邪が強くと水穀の清濁を分別できず下痢がおこる。

⑥舌苔白膩または淡黄で膩，脈濡緩または弦滑——これらは湿熱薫蒸の象である。

【4】寒湿による発熱

主 症：悪寒，発熱，頭重，鼻閉，泛悪または下痢（水様便）

随 伴 症：胃脘部のつかえ，食少，腹痛，腹鳴

舌 脈 象：舌苔薄白または白膩，脈濡

証候分析：①悪寒，発熱，頭重，鼻閉——寒湿の侵襲をうけたり，または湿が寒化して陽気を閉塞させると悪寒，発熱がおこる。また寒湿が清竅に鬱すると頭重，鼻閉がおこる。

②泛悪または下痢——寒湿が胃腸に侵襲して脾の運化機能が悪くなり，そのために昇降が失調して清濁の分別ができなくなるとおこる。

③胃脘部のつかえ，食少——寒湿困脾によりおこる。

④腹痛，腹鳴——寒湿内盛となり胃腸の気機が阻滯するとおこる。

⑤舌苔薄白または白膩，脈濡——これらは寒湿の象である。

【5】暑湿による発熱

主 症：身熱または身熱不揚，汗が出て改善しない，頭脹，頭がぼんやりする，突然昏倒したり人事不省となることもある

随 伴 症：咳嗽，胸悶，心煩，口渴，口淡で粘り，小便短赤

舌 脈 象：舌苔厚膩，脈洪数または滑数

証候分析：①身熱または身熱不揚——夏の暑い季節には暑湿が盛んになる。暑湿を感受し，体内にて暑邪が盛んであると身熱がおこり，湿邪が盛んであると身熱不揚がおこる。

②頭脹，突然の昏倒，人事不省——暑湿が清竅を蒙閉し，清陽が頭部に昇らないと頭脹がおこる。突然の昏倒，人事不省がおこることもある。

③心煩，口渴，小便短赤——暑邪は陽邪であり，最も津液を損傷しやすいためにおこる。

④汗が出て熱は改善しない，口淡で粘り——湿は陰邪であり，粘滯性がある。気機を阻滯させやすく，すばやく除去できないので汗が出て熱は改善せず，味覚は淡白で口が粘りようになる。

⑤咳嗽，胸悶——暑湿の邪が肺衛に侵襲するとおこる。

⑥舌苔厚膩，脈洪数または滑数——暑湿による象である。

【2】内傷発熱

【1】陰虚による発熱

主 症：午後または夜間の潮熱，または骨蒸潮熱，心煩，盗汗，手足心熱

随 伴 症：不眠，多夢，口や咽頭部の乾き，遺精，滑泄，月経不順，大便乾結，尿量は少な

く黄色

舌脈象：舌質紅で乾いている，または裂紋がある，無苔または少苔，脈細数

証候分析：①午後または夜間の潮熱，または骨蒸潮熱，手足心熱——陰液が不足すると内熱が生じるためにおこる。

②心煩，不眠，多夢——陰虚のために陽を制御できず虚火が生じ，虚火が上炎して心神に影響するとおこる。

③盗汗，口や咽頭部の乾き——内熱が津液にせまり津液が外泄するとおこる。

④遺精，滑泄——陰虚のために相火が妄動するとおこる。

⑤月経不順——陰と血は同源の関係にあり，陰虚のために生じた虚熱が血分に影響すると月経不順がおこる。

⑥大便乾結，尿量は少なく黄色，舌質紅で乾いている，または裂紋がある，無苔または少苔，脈細数——これらは陰虚のために生じた内熱が津液や陰液を損傷しておこる象である。

【2】気虚による発熱

主 症：発熱は疲労後におこる，または増悪，高熱または微熱

随 伴 症：頭暈，乏力，自汗，感冒を患いやすい，息切れ，懶言，食少，大便溏薄

舌脈象：舌質淡，舌苔薄白，脈細弱

証候分析：①発熱は疲労後におこる，または増悪，高熱または微熱——気虚発熱は過度の労倦，脾気虚弱によりおこるものが多い。したがって発熱は疲労後におこったり増悪するものが多い。また熱の程度は高くなるものと，低いものがある。

②頭暈，乏力，息切れ，懶言——気虚のために推動機能が無力になると血行も悪くなり，気血による栄養が悪くなるとおこる。

③自汗，感冒を患いやすい——気虚のために衛外機能が低下するとおこる。

④食少，大便溏薄——脾気虚弱のために運化機能が低下するとおこる。

⑤舌質淡，舌苔薄白，脈細弱——これらは気虚の象である。

【3】血虚（陽浮）による発熱

主 症：潮熱，盗汗，手足心熱，頭暈，眼花（目がくらむ，かすむ）

随 伴 症：心悸不安，不眠，多夢，顔色がさえない，または顔面紅潮，口唇の色は淡白，小便黄，大便乾

舌脈象：舌質紅，少津少苔，脈細弱または細数

証候分析：①潮熱，盗汗，手足心熱，顔色紅潮——血は陰に属している。陰血が不足し陽が亢進するとこれらの症状がおこる。

②心悸不安，不眠，多夢——血虚のために心をうまく栄養できないとおこる。

③頭暈，眼花，顔色がさえない，口唇の色は淡白——血虚のために清竅をうまく栄

養できないとおこる。

④小便黄，大便乾——血虚陽浮により津液を損傷するとおこる。

⑤舌質紅，少津少苔，脈細弱または細数——これらは血虚陽浮の象である。

【4】肝鬱化火による発熱

主 症：情緒の変化により発熱する，時に身熱や心煩を感じる

随 伴 症：いらいらする，怒りっぽい，胸脇脹悶，よく溜め息をつく，口苦，女性には乳房脹痛，月経不順，月経時の腹痛などが現れる

舌脈象：舌質紅，舌苔黄，脈弦数

証候分析：①情緒の変化により発熱，時に身熱や心煩を感じる——情緒の変化により肝鬱となり，それが改善しないで化火すると，時に身熱や心煩がおこるようになる。また情緒の変化により起伏する特徴がある。

②いらいらする，怒りっぽい，胸脇脹悶，よく溜め息をつく——肝気鬱結により気機がスムーズにいかないとおこる。溜め息をつくとき機が一時的に動き気持ちはよいため，よく溜め息をつくようになる。

③乳房脹痛，月経不順，来潮時の腹痛——肝は蔵血を主っているが，肝鬱気滞により気血の流れが悪くなると，これらの症状がおこる。

④口苦，舌質紅，舌苔黄，脈弦数——これらは肝鬱化火の象である。

【5】瘀血停滞による発熱

主 症：午後または夜間に発熱，身体の一定した部位に固定痛または腫塊があることが多い，または肌膚甲錯（さめはだ）となることがある

随 伴 症：口や咽頭部が乾くがあまり飲まない，顔色暗黒または萎黄

舌脈象：舌質青紫または紫斑がある，脈細澀

証候分析：①午後または夜間に発熱——瘀血が内停すると病は血分にあり，血は陰に属しているため午後または夜間に発熱がおこるものが多い。

②身体の一定した部位の固定痛または腫塊——瘀血が停滞している部位は気血の流通が悪いのでおこる。

③肌膚甲錯，顔色暗黒または萎黄——瘀血が停滞すると新血が生じず，そのために血気が皮膚や頭顔面部をうまく濡養できないとおこる。

④口や咽頭部が乾くがあまり飲まない——鬱熱が内にあると口や咽頭部の乾きがおこる。ただし熱は営中に鬱しているため，水はあまり飲まないという特徴がある。

⑤舌質青紫または紫斑がある，脈細澀——これらは瘀血内停による血行不良の象である。

治療

1 外感性の発熱

【1】風寒による発熱

治 法：解表散寒，宣肺退熱

処 方 例：風池，外関，列欠，大椎

方 解：風池により解表散寒をはかり，外関，大椎により解表退熱をはかる。さらに列欠により肺気の宣通をはかる。この配穴により汗が出，邪が去れば解熱する。

操 作：各治療穴に提挿瀉法または捻転瀉法を施す。くりかえし捻針して針感を強め，発汗を促す。1日2回治療を行う。

【2】風温による発熱

治 法：疏風散熱，宣肺去痰

処 方 例：風池，大椎，合谷，尺沢，曲池

方 解：風池，大椎，合谷により疏風解表，散熱をはかる。さらに曲池を配穴して解熱作用を増強する。また尺沢により肺の邪熱を清熱し，宣肺去痰をはかる。

操 作：各治療穴に提挿瀉法を施す。また大椎，曲池，合谷は置針して運針を行い，針感を強め解表退熱を促す。1日2回治療を行う。

【3】湿熱による発熱

治 法：疏風解表，去湿化濁

処 方 例：外関，合谷，大椎，陰陵泉，足三里

方 解：外関，合谷により表にある湿熱の除去をはかり，大椎により解表退熱をはかる。また陰陵泉，足三里により内の湿濁の除去をはかる。この処方には退熱去湿の作用がある。

操 作：各治療穴に提挿捻転瀉法を施す。1日1～2回治療を行う。

【4】寒湿による発熱

治 法：散寒化湿，解表退熱

処 方 例：風池，外関，中腕，天枢，足三里，至陽

方 解：風池，外関により表にある寒湿の除去をはかり，中腕，天枢，足三里により和胃止瀉をはかる。また至陽により陽気を宣通させ化湿をはかる。このようにして陽気が宣通し寒湿が散じれば，諸症状は消失する。

操 作：各治療穴に提挿捻転瀉法を施す。至陽には灸頭針を3～5壮施す。1日1～2回

治療を行う。

【5】暑湿による発熱

治 法：疏風散邪，清暑化湿

処 方 例：大椎，曲池，風池，合谷，十二井穴

方 解：大椎，曲池により速やかに暑熱を清し，風池，合谷により解表を行い，暑湿の邪が汗とともに出ていくのを促す。十二井穴を瀉血すると暑湿を清熱，除去する作用が増強し，また暑邪が心包に影響するのを防止することができる。

操 作：大椎，曲池，風池，合谷には徐疾瀉法を施し，くりかえし捻針して針感を増強し，30分間置針する。また十二井穴には三稜針で点刺瀉血を施す。1日2回治療を行う。

外感性の発熱の治法と選穴

症 候	病因病機	治 法	選 穴
外感性の発熱	風 寒	解表散寒	風池，外関
		宣肺退熱	列欠，大椎
	風 温	疏風散熱	風池，大椎，合谷
		宣肺去痰	尺沢，曲池
	湿 熱	疏風解表	外関，合谷，大椎
		去湿化濁	大椎，陰陵泉，足三里
	寒 湿	散寒化湿	風池，外関，中腕，天枢
		解表退熱	足三里，至陽
	暑 湿	疏風散邪	大椎，曲池
		清暑化湿	風池，合谷，十二井穴

2 内傷性の発熱

【1】陰虚による発熱

治 法：滋陰清熱

処 方 例：心俞，腎俞，内関，神門，太衝，陽陵泉，太谿，三陰交

方 解：本証は真陰が損傷しているために，水火のバランスが失調し，心火が亢進すると

おこる。また水不涵木 [水が木を潤せないこと] のために肝火が亢進しておこるものもある。腎俞、太谿、三陰交により腎水を滋養し、心肝の火の亢進を抑止する。また心俞、内関、神門により、心火を清し神明の安定をはかる。太衝、陽陵泉には平肝潜陽の作用があるので、これにより風火の消去をはかる。この処方には真陰を滋養し、虚火を清瀉する作用がある。

操作：腎俞、太谿、三陰交には針にて補法を施し、中程度の刺激を与える。心俞、内関、神門、太衝、陽陵泉には針にて瀉法を施し、強刺激を与える。置針は30分間行う。1日1回または隔日治療を行う。

【2】気虚による発熱

治法：調中益気

処方例：脾俞、胃俞、中脘、足三里、神闕

方解：脾俞、胃俞、中脘により脾胃の生化機能の向上をはかる。また足三里、神闕により脾胃の温補をはかる。中気（中焦の気）が回復すると、気虚によりおこっている熱勢は消失する。

操作：脾俞、胃俞、足三里には、針にて補法を施し、軽刺激を与え、さらに棒灸または隔姜灸を施す。中脘には平補平瀉法を施し、中程度の刺激を与える。また神闕は禁針であり、これには附子餅灸法または塩か生姜を置いて棒灸を施す。1日1回または隔日治療を行う。

【3】血虚（陽浮）による発熱

治法：滋養陰血、清（虚）熱

処方例：心俞、脾俞、内関、足三里、三陰交、陰郄

方解：心俞、脾俞により心陰と心血を滋養し、内関を配穴して清心瀉火、寧心安神をはかる。三陰交にて滋陰補腎をはかり、腎陰のサイドから心陰を助ける。また足三里にて健脾、健胃をはかり生化（生血）を促す。陰郄は盗汗を改善する目的と心陽を収斂させる目的で用いている。このようにして血虚の状態が改善すれば、熱勢は消失する。

操作：心俞、脾俞、三陰交、足三里には、針にて補法を施し、内関、陰郄には針にて瀉法を施す。刺激量は中程度とし、15~20分間置針する。1日1回または隔日治療を行う。

【4】肝鬱化火による発熱

治法：疏肝解鬱、清熱

処方例：太衝、風池、行間、曲池、合谷、神門

方解：太衝、行間にて疏肝理気、鬱火の清熱をはかる。さらに風池、合谷、曲池を配穴して鬱火の清熱を助ける。神門は清心安神をはかるために用いている。

操作：太衝、行間、曲池、合谷には捻転提挿瀉法を施し、風池、神門には平補平瀉法を施す。刺激量は中程度とし、20~30分間置針する。1日1回治療を行う。

【5】瘀血停滞による発熱

治法：活血化瘀、行気通絡

処方例：心俞、膈俞、太淵、内関、太衝

方解：心俞、膈俞にて行血化瘀、寛胸理気をはかり、太淵にて理肺通脈をはかる。また内関、太衝にて理気通絡をはかる。これにより気めぐりが改善すれば血めぐりも改善し、瘀血は消散し、熱勢は消失する。

操作：心俞、膈俞には捻転補法を施す。軽刺激を与え、各治療穴に2~3分間刺激を与えて抜針する。太淵、内関、太衝には平補平瀉法を施す。刺激量は中程度とし、20~30分間置針する。

内傷性の発熱の治法と選穴

症候	病因病機	治法	選穴
内傷性の発熱	陰虚	滋陰清熱	心俞、腎俞、内関、神門、太衝、陽陵泉、太谿、三陰交
	気虚	調中益気	脾俞、胃俞、中脘、神闕、足三里
	血虚	滋養陰血	心俞、脾俞、内関、足三里、三陰交、陰郄
		清（虚）熱	
	肝鬱	疏肝	太衝、風池、行間、曲池、合谷、神門
解鬱			
清熱			
瘀血	活血化瘀	心俞、膈俞、太淵、内関、太衝	
	行気通絡		

古今処方例

①『神応経』

「身熱、陷谷、呂細。余熱が尽きないもの、曲池、三里、合谷。大熱、曲池、三里、復溜。熱多寒少、間使、三里。」

②『針灸聚英』

「寒熱，潮熱，煩熱，往来熱あり。熱病で汗出でざるは，商陽，合谷，陽谷，俠谿，厲兌，勞宮，腕骨，以て導氣す。熱に度なく止まざるは，陷谷，血以て泄熱す。」

③『采艾編翼』

「身熱頭痛には，曲差，腦空，玄釐，大杼，命門，腎俞。諸陽の熱には，後頂。心煩して渴くものには，太白，陽谿，少衝，通里。熱して痛むものには，曲泉。汗が出ないものには，上星，玄顛，孔最，前骨，腕骨。」

④『類経図翼』

「骨蒸寒熱夜熱：百勞，膏肓，肺俞，魄戶，脾俞，腎俞，四花穴，間使，足三里。」

⑤『増訂中国針灸治療学』

「五勞羸瘦には，足三里に針灸をする。体熱勞嗽には，魄戶に針灸をする。虚勞骨蒸盗汗には，陰郤に針灸をする。真氣不足には，氣海に灸をする。」

その他の療法

【耳針】

選穴：肺，気管，内鼻，咽喉，額

操作：浅刺して捻針し，30分間置針する。通電も可。

【皮膚針】

頸部の前後および鼻翼部を取穴し，さらに前額部と側頭部を加える。各側に3～4行取り，それぞれの間隔を1cmあける。頸部と前額部には軽刺激，頸部の前後には強刺激，鼻翼部には中程度の刺激を与える。

【中薬】

- ①外感風寒：通宣理肺片
- ②風温上受：銀翹解毒片または桑菊感冒片
- ③外感寒湿または暑湿：藿香正气散
- ④湿熱薰蒸：甘露消毒丹
- ⑤陰虚内熱：知柏地黄丸
- ⑥気虚発熱：補中益气丸
- ⑦血虚陽浮：生血丸
- ⑧肝鬱化火：丹梔逍遥丸
- ⑨瘀血停滞：七厘散

参考事項

- ①外感発熱の初期は病位は浅く，適時に治療すればただちに治癒する。しかし病邪の勢力

が強く，正気が虚している場合は，変化は急激であり，邪毒が深く入ると瘵厥，昏迷，発黄，または亡陽，亡陰，陰竭などの重篤な状態になるので，注意する必要がある。

②高熱の患者に対しては，適時に解熱をはかる必要がある。状況に応じて現代医学的処置を施すとよい。

③各種の原因によりおこる発熱は，相互に関連することが多い。例えば外感発熱が治癒しないと，内傷発熱となることがある。気鬱発熱により陰液を損傷すると，陰虚発熱となるし，気血虚弱によりおこる発熱では，気虚と血虚が相互に影響し，混合型として現れることが多い。また肝鬱気滞の場合は，それが化火すると陰を損傷するし，気滞により血瘀をひきおこすこともある。したがって治療の主導権を握るためには，このような変化の関連性を知ったうえで各種の発熱に対して分析，処理を行わなければならない。

2. 厥証

厥証には2つの内容がある。1つは突然昏倒，人事不省を指し，1つは身体と四肢の厥冷（冷える）を指す。したがって本病証と昏迷，閉証，脱証とは多くの場合は交錯している。ここでは突然の昏倒，人事不省を主症とする病証について述べる。臨床上は気，血，痰，食と関係する厥証がよく見られる。現代医学ではショック，虚脱などによる失神がこれに相当する。

病因病機

厥証をひきおこす原因は，数多くあるが，その病機は主として気機の逆乱により昇降や気血の運行が失調することにある。一般的には気厥，血厥，痰厥，食厥の4つに分類されている。

1 気厥

実証の気厥は，怒ったり，驚き恐れったりして情志過極となり，気機が逆乱し清竅を蒙閉するとおこる。また虚証の気厥は，平素から元氣虚弱な者が，悲哀，恐怖，過労などの原因により気虚下陷となると，清陽が頭部に昇らずにおこる。